

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32808

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13930

研究課題名（和文）幼児教育・保育におけるアクティブラーニングのユニバーサルデザイン

研究課題名（英文）Universal design of active learning in the early childhood care and education

研究代表者

橋本 陽介（Hashimoto, Yosuke）

白梅学園大学・子ども学部・准教授

研究者番号：20712855

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：幼児教育・保育におけるアクティブラーニングの現状と課題を調査し、ユニバーサルデザイン化に向けて必要な要素を検討した。その結果、幼児教育・保育におけるアクティブラーニングの実践には、ユニバーサルデザイン化が必須となっていた。また、幼児教育・保育においては、アクティブラーニングのユニバーサルデザイン化を進める際に、保育者が果たす役割が重要になっていた。加えて、障害の診断を有していないが配慮を必要とする幼児が在籍しているクラスでは、アクティブラーニングを実践する際に、ユニバーサルデザイン化に向けて、数多くの要素を必要としていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2018年4月より、保育所・幼稚園・認定こども園では、いわゆる「アクティブラーニング」を実践することが必須となった。一方、これらの施設には、障害児を含む、配慮を必要とする幼児が在籍している。そのような現状を踏まえ、幼児教育・保育におけるアクティブラーニングの現状と課題、および、そのユニバーサルデザイン化に必要な要素がクラスの状況によって異なることを明らかにしたことは、今後の幼児教育・保育における実践の向上と共生社会の実現に向けた基礎的資料としての社会的価値を有する。

研究成果の概要（英文）：The investigation of current status and issues of active learning in the early childhood care and education were showed that universal design was indispensable for the practice of active learning. It also showed that childcare workers play an essential role in promoting universal design of active learning in early childhood care and education. In addition, in classes with infants who need consideration without diagnosis of disability, a number of conditions for universal design are required when implementing active learning.

研究分野：特別支援教育

キーワード：アクティブラーニング ユニバーサルデザイン 幼児教育 保育

1. 研究開始当初の背景

2018年4月より、保育所・幼稚園・認定こども園(以下、幼児施設とする)では、「主体的・対話的で深い学び」である、いわゆる「アクティブラーニング」を実践することが必須となった。また、幼児施設には、障害児や「気になる子」といった何らかの配慮を必要とする幼児(以下、要配慮児)も在籍している。従って、幼児施設においてアクティブラーニングを実践する際には、要配慮児を考慮した実践が必要となる。さらに、要配慮児を含むすべての幼児を対象として、アクティブラーニングの実践を進めるにあたっては、“ユニバーサルデザイン化”することが有効であると考えられる。

しかし、これまでの研究では、幼児教育・保育においてアクティブラーニングとユニバーサルデザインを同時に取り上げて報告されているものはみられていなかった。そこで、「幼児教育・保育におけるアクティブラーニングのユニバーサルデザイン化に有効な実践手法の解明」を研究課題の核心をなす学術的「問い」として、研究を遂行することとした。

2. 研究の目的

研究の目的は、a)幼児教育・保育におけるアクティブラーニングのユニバーサルデザイン化に必要な要素を明らかにし、b)幼児教育・保育での実践を支援するためのチェックリストを開発することとした。

3. 研究の方法

本研究の開始と同時に、COVID-19の感染が拡大し、計画していた調査研究を予定通りに遂行していくことが、極めて困難な状況に陥った。そこで、遂行可能な研究計画に修正をしながら、以下2つの方法を用いて、研究の目的として設定したa)幼児教育・保育におけるアクティブラーニングのユニバーサルデザイン化に必要な要素を明らかにすることに重点を置いて当該研究課題を進めていくこととした。

- (1)本研究への協力が得られた幼児施設に赴き、アクティブラーニングを伴う活動の実践場面の観察調査を行うとともに、担任保育者を対象としたインタビュー調査を実施した。その上で、調査で得られた結果をもとに、幼児教育・保育におけるアクティブラーニングの実践に関する現状と、ユニバーサルデザイン化に向けた課題を明らかにすることとした。
- (2)幼児施設に勤務し、3歳(年少)児以上のクラスを担当する保育者を対象に、Webでのアンケート調査を実施した。その上で、調査で得られた結果をもとに、アクティブラーニングにおけるユニバーサルデザイン化に向けた現状と課題を明らかにすることとした。

4. 研究成果

上記で述べたそれぞれの方法を遂行したことにより、以下のような研究成果が得られた。

- (1)幼児施設でのアクティブラーニングを伴う活動の実践場面の観察と、担任保育者へのインタビュー調査から、次のようなことが明らかとなった。
アクティブラーニングの実践に関する現状として、実践には要配慮児への担任保育者または加配保育者による支援が必要不可欠な状況にあった。加えて、アクティブラーニングの実践においては、担任保育者や加配保育者などの大人の働きかけ方が、主体的・対話的な場面のユニバーサルデザイン化に影響することが明らかとなった。
アクティブラーニングのユニバーサルデザイン化を進める上では、情報提示の仕方や個々の幼児に対する大人の見方が課題となっていることが明らかとなった。特に、個々の幼児に対する大人の見方は、周囲の幼児に影響を与えるため、結果として活動にも影響することが明らかとなった。
- (2)幼児施設に勤務し、3歳(年少)児以上のクラスを担当する保育者を対象とした、Webでのアンケート調査から、次のようなことが明らかとなった。
アクティブラーニングの実践に関する現状として、要配慮児が在籍するクラスほど、アクティブラーニングを伴う活動に取り組んでいた。従って、アクティブラーニングの実践には、ユニバーサルデザイン化が必須の状況にあることが明らかとなった。
アクティブラーニングを実践するクラスでは、ユニバーサルデザイン化に向けて、特に「指示の出し方(わかりやすく具体的で、かつ短く、視覚情報も活用した指示を出す)」や「活動の見通し(活動の流れや内容、方法、時間などに見通しがもてる)」に関する工夫が行われていた。
要配慮児の中でも、障害の診断を有する幼児が在籍するクラスでは、アクティブラーニング

を実践する際に、当該幼児が在籍していないクラスよりも、「指示の出し方」に関してより工夫している状況にあった。

要配慮児の中でも、障害の診断を有していないが何らかの配慮を必要とする幼児が在籍するクラスでは、アクティブラーニングを実践する際に、当該幼児が在籍していないクラスよりも、「場の構造化(子どもが見ただけで、迷わずに自発的に活動できる)」や「ルールの確立(声の大きさや話の聞き方、活動の仕方など一定の決まりを示す)」、「指示の出し方」に関してより工夫している状況にあった。

一方で、要配慮児が在籍するクラスでは、「場の構造化」や「活動の見通し」が、アクティブラーニングに取り組む際の工夫として、課題となっていることが明らかとなった。

以上のことから、国内での幼児教育・保育におけるアクティブラーニングの実践には、ユニバーサルデザイン化が必須となっている現状にある。また、幼児教育・保育においては、アクティブラーニングのユニバーサルデザイン化を進める際に、保育者が果たす役割を、特に重要視していかなければならないことが明らかになった。加えて、要配慮児が在籍するクラスでは、障害の診断の有無によって、アクティブラーニングを実践する際に必要となるユニバーサルデザイン化に向けた要素が異なっている状況にあった。特に、要配慮児の中でも、障害の診断を有していないが何らかの配慮を必要とする幼児が在籍するクラスでは、アクティブラーニングを実践する際に、より多くの工夫が必要となっていた。

従って、COVID-19 による感染症の国内における法的位置づけが変更となった現状を踏まえ、より多くのクラスを対象とした実践場面の調査を重ね、クラスに在籍する幼児の状況と合わせながら、アクティブラーニングのユニバーサルデザイン化に必要な要素を精査していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 橋本 陽介	4. 巻 45
2. 論文標題 発達障害児童による1人1台端末を使用した集団活動における課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 29 ~ 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15077/jjet.s45021	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 橋本陽介
2. 発表標題 幼児期のアクティブラーニングにおけるユニバーサルデザイン化に向けた工夫の取組状況 保育者を対象としたアンケート調査から
3. 学会等名 日本特殊教育学会第62回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 橋本陽介
2. 発表標題 幼児期のアクティブラーニングにおけるユニバーサルデザイン化に向けた事例的検討
3. 学会等名 日本特殊教育学会第61回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋本陽介・熊井正之
2. 発表標題 発達障害児の感覚特性に応じた学習環境 学習時の照明環境に焦点をあてた検討
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 佐久間路子編著, STEP 1-7著者: 橋本陽介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 140
3. 書名 イラストBOOK たのしい保育 子どもの「こころ」を のぞいてみる	

1. 著者名 高橋智・加瀬進監修, 日本特別ニーズ教育学会編, 第12章第1節著者: 橋本陽介	4. 発行年 2020年
2. 出版社 文理閣	5. 総ページ数 318
3. 書名 現代の特別ニーズ教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------